

中学校長会会長賞

光り輝く社会

堺市立 美木多中学校 三年

北川 智帆世

「人生、めっちゃ楽しい。」と思って私は、毎日生きています。ですが、今の私があるのは、私を見捨てないで、信じて待ってくれた人たちがいるからです。

私は、中学一年生の頃、拒食症になりました。摂食障害ともいいます。それは、食べ物を口に入れることが怖くなり、最悪の場合、死に至ることもある心の病です。私も最初は少し痩せたいなと軽い気持ちでダイエットを始めました。始めた頃は、食べる量を少し減らし、食べたいという気持ちを我慢していました。ですが、私は負けずぎらいの性格で頑固なので「絶対、細くなってやる。」と決めてからは、日に日に食べる量が減っていきました。初めは、食べたい気持ちを我慢していたはずなのに、次第に食べるのが怖くなり、私の体は痩せていきました。そこからの私は、心も体もどんどんおかしくなっていっただけです。体重は十キロ近く落ちてゆき、目もボーツとして、顔は茶色く顎はとんがり、手はパンパンに腫れて、色々なところが傷だらけでした。私は部活動が大好きなのですが、その大好きな部活動もできなくなりまし

た。母は、そんな風になっていく私を見て、ものすごく心配していたし、私にご飯を食べるように何度も言っていました。その時の私は、本当に壊れていたもので、私にご飯を食べさせようとする人は全員、悪い人にか見えなくなっていました。ここまでくると、人と話すこともつらくなり、生きていく意味も分からなくなっていました。母も頭を抱えていましたが、元の私に戻ってくることを信じて、母は私に何度も正面からぶつかり、何度私が言うことを聞かなくても諦めませんでした。そうして諦めず、最後まで信じて待ってくれていた母のおかげで、間違えた道を歩いていた私は、少しずつですが、戻ってくることができました。ですが、食べるのが怖いという感情や、私の心はすぐに治せるものではありません。だから、初めは、泣きながら食べ物を口にするのもあったし、学校に行けない日もありました。そんな私を、批判してくる人や、冷たい目で見る人もいました。何度もくじけそうになったけど、母が信じ続けてくれたおかげで、私の心と体は元気を取り戻していきました。母のように信じて待ってくれる人が、

私のまわりになかったら、私は、今どうなっているか分かりません。たぶん、拒食症が悪化しているだろうし、当然今のような生活は送れていないだろうと思います。

人の心は、とても弱いです。弱いから、選択を間違えることがあるし、悪い方向に進んでしまうこともあります。それでも、人がちゃんと生きていけるのは、誰かから信じられているから、誰かを信じているからです。信じてもらえるということは、期待されているということ。人を信じているということは、その人に期待しているということです。存在を否定されて、何も信じてもらえず、期待されなくなると、人は生きていけないと思います。例え、どんなに悪いことをしていたとしても、その人を信じてあげてください。信じられているから、人は頑張ろうと思える。立ち直ろうと思えるのです。すべての人が、すべての人を信じられるような世の中になったら、社会は、きっと明るくなると思います。だって、一人の人間の存在をみんなで認め合い、信じ合うのだから、すべての人間が笑顔で毎日、生きてゆけるということです。笑顔があふれている社会は、光り輝くのです。

